

## 論文

## モンゴル帝国時代のサハリン島の史料に見える方位のずれについて

## Deviation in orientation due the Mistranslation of Historical Documents of Sakhalin Island during the Mongol Empire

中 村 和 之

NAKAMURA Kazuyuki

## 抄録

モンゴル帝国・元朝時代の漢語史料やペルシア語史料において、中央アジアに関する記述の中に、時計回りに 90 度ずれた方位感覚を示す例が見られる。その理由について、もともとはモンゴル語で前後左右と表現されたものが、漢語に翻訳されたときにそれぞれ南北東西とされ、史書にそのまま記載された結果、実際の方位とはずれたという説が発表された。

筆者は、サハリン島に関する漢語史料のなかに、実際とは反時計回りに 90 度ずれた例があることに気づいた。その理由は、サハリン島からアムール河下流域にある元朝の拠点を見た方向、つまり西を前としたからであろう。アイヌの居住域であるサハリン島の南部はモンゴル語で左と表現される。モンゴル語の左が漢語に翻訳された際に東とされたため、実際の方位と誤りが生じたのである。このように北東アジアに関する史料によっても、モンゴルの方位の概念は東西南北ではなく、前後左右であったことが裏づけられた。

キーワード：サハリン島、モンゴル帝国、元朝、方位、アイヌ

## 1. はじめに

モンゴル帝国・元朝時代の漢語史料やペルシア語史料において、史料に記された方位が実際の方角から見て時計回りに90度ずれるという例があることが報告されている。本稿では、北東アジアのアイヌをめぐる記述に見える方位のずれについての例を紹介し、あわせてその理由について考察を加えたい。

## 2. 『元史』に見える吉里迷と骨嵬・亦里于の位置関係についての疑問

『元史』には、アイヌ（骨嵬）についての記述がある〔中村 2021b〕。骨嵬とは、オルチャ語などのツングース諸語や古アジア系のニヴフ（旧称はギリヤーク）語でアイヌを意味する *kuɣi~kuyi~kui* を漢字の音で宛てた表現である。『元史』巻5、世祖本紀 2、至元元年 11 月辛巳（西暦の 1264 年 11 月 30 日）、には元軍が骨嵬を攻撃したことについて、下のような記述がある〔宋 1976:100〕。これが『元史』に記された骨嵬についての最も古い記録である。以下本稿では、まず史料原文を引用し、つぎに筆者による訳をあげる。

征骨嵬。先是、吉里迷内附、言其國東有骨嵬・亦里于兩部、歲來侵疆、故往征之。

〔訳〕 骨嵬を征した。是より先、吉里迷が内附し、其の国の東に骨嵬と亦里于という両つの部が有って、歳来て疆を侵すと言った、故に往して之を征した。

吉里迷は吉烈迷・吉列迷などとも表記されるが、ニヴフのことであり、ツングース諸語でニヴフを意味する *gillemi* を漢字の音で宛てた表現である。ここでは、モンゴル軍は骨嵬と亦里于が吉里迷の境界を侵すという訴えを受けて、骨嵬を征伐したと記されている。ただしこれは、あくまでモンゴル側による記述であることに留意しなければならない。なお、亦里于是『元史』のここにしか見られないため、どのような集団か詳細は不明である。ただ、骨嵬と同じ方向から吉里迷の居住域に侵入していることから、筆者は亦里于もアイヌの一集団なのではないかと考えている〔中村 2006〕<sup>(1)</sup>。

さて、ここで筆者が目にするのは、「(吉里迷)の国の東に骨嵬と亦里于という両つの部が有」という記述である。サハリン島（旧称は樺太）で、吉

里迷の居住域の東に骨嵬がいるというのは、どういうことなのであろうか。まず、吉里迷がサハリン島のどのあたりに住んでいたのかについて、別な史料で検討してみよう。『国朝文類』巻41、経世大典序録、政典、招捕、遼陽骨嵬、に引用されて残された『経世大典』には、つぎのようにある<sup>(2)</sup>。

至元十年、征東招討使塔匣刺呈、前以海勢風浪難渡、征伐不到鰓因・吉烈迷・骨嵬等地。去年征行至斡兒哥地、問得兀的哥人厭薛、稱欲征骨嵬、必聚兵候冬月賽哥小海渡口結凍。冰上方可前去。先征鰓因・吉烈迷、方到骨嵬界。云云。

〔訳〕至元十年(1273)、征東招討使の塔匣刺の呈に「前に海が風と浪で勢たために渡り難く、鰓因・吉烈迷・骨嵬等の地を征伐するには到らなかった。去年(軍を)征行め、斡兒哥の地に至り、兀的哥人の厭薛に問した得『骨嵬を征とうと欲するなら、必ず兵を聚め、冬月に賽哥小海の渡口が結凍するのを候つべきである。氷上であれば方て前去むことが可きる。先に鰓因・吉烈迷を征ち、方て骨嵬の界に到る』と称った」とある。云云。

まず上に見える「斡兒哥」とは、『元史』や『大明実録』などの元・明代の史料に「奴兒干」と見えるアムール河下流域の地名で、現在のロシア連邦ハバロフスク地方のティル村のことである。ここには、元代には東征元帥府、明代には奴兒干都司が置かれ、アムール河下流域の統治の拠点であった〔中村2008〕。奴兒干はこれまで「ヌルカン」ないし「ヌルガン」と呼ばれてきたが、「ヌルゲン」がより正しいようである〔中村2021a〕。冬になると渡ることができた「賽哥小海」とは、間宮海峡のことであろう。賽哥ということばが、何語であるかは明らかにできないが、「兀的哥人の厭薛」の言うところを記しているのであるから、おそらく兀的哥の言葉であろう。兀的哥はツングース系のウデヘ民族の呼称に通じるから、兀的哥の言葉はツングース諸語に属する言葉だったのではないかと思われる。

上の記述のように間宮海峡を渡って鰓因と吉烈迷を討ち、その後に骨嵬の境界にいたるという表現からは、間宮海峡を渡ってすぐのところに鰓因がおり、その先に吉烈迷がいたことになる。そして骨嵬は吉烈迷のさらに先にいたということ

になる。南北に長いサハリン島の形を考えると、鯿因の南に吉烈迷が住んでおり、骨嵬はさらに南に住んでいたと考えられる。

なお鯿因がどのような集団かは明らかにできないが、筆者はツングース系の集団ではないかと考えている。19世紀のサハリン島では、ほぼ北緯50度を境にしてニヴフが北に、アイヌが南に住んでいた。また北緯50度より北の東岸部などには、ツングース系のウイльта（旧称はオロッコ）が住んでいた。トナカイ飼育民のウイльтаの祖先が、いつころサハリン島に移住したのかは不明である。しかし、吉烈迷がニヴフ、骨嵬がアイヌの祖先であるとすれば、鯿因はウイльтаではないにしてもツングース系の集団であったと考えるべきではないか。先にサハリン島の北に鯿因と吉烈迷がおり、元朝側つまり大陸側から見てその向こうに骨嵬がいたと書いたが、それは19世紀の民族分布のように、北にニヴフ、南にアイヌが居住するという状況が、13世紀には出来つつあったことを意味する。

では、考古学的な視点からもこの問題を検討してみよう。日本列島の最後の土

器文化であり、中世アイヌ文化の前段階にもあたる、擦文文化の遺跡の分布を見てみよう。図1は、M. M. プロコーフィエフほか『サハリンと千島の擦文文化の土器—サハリンと千島へのアイヌ民族の進出』所載の「擦文文化の遺跡の分布図」である〔プロコーフィエフほか2012:81〕。原著の出版は1990年であるから、今からは30年以上も前の著作であり、現在はサハリン島でもより多くの擦文文化の遺跡が見つかってい

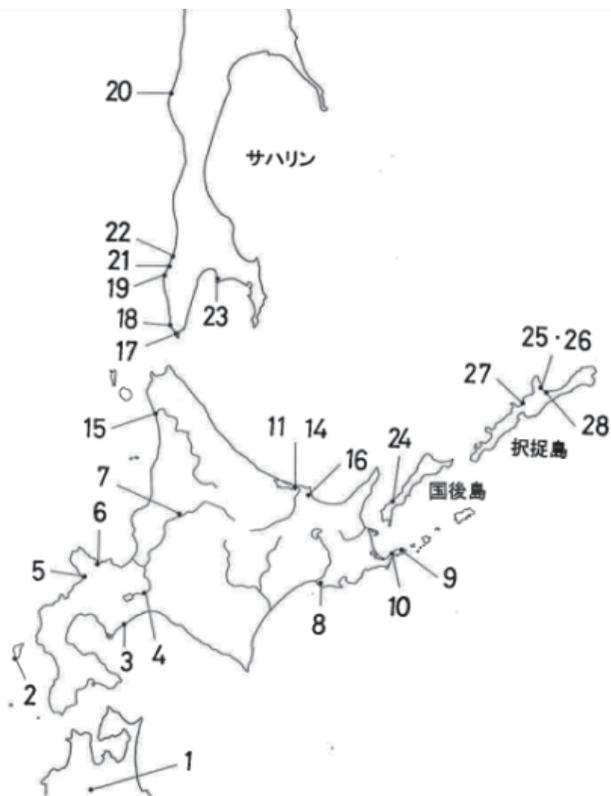


図1 擦文文化の遺跡の分布図

るものと考えられるが、サハリン島の擦文文化の遺跡は、島の南部に分布する傾向があることがわかる。瀬川拓郎の指摘によれば、プロコーフィエフらがあげている擦文土器片はおおむね 11 世紀に属し、1 点だけが 12 世紀のものと考えられるので〔瀬川 2008〕、11 世紀以降、アイヌの祖先が北海道からサハリン島

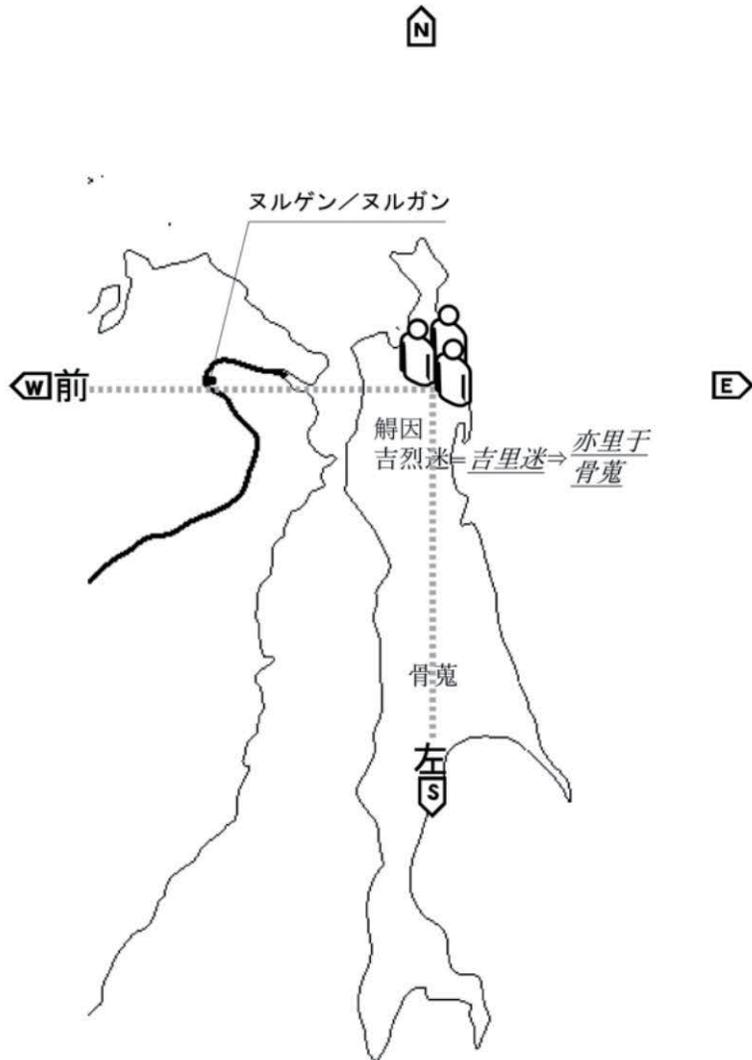


図2 『元史』と『経世大典』に見えるサハリン島の諸集団

の南部に移っていたということができよう。これが『元史』・『経世大典』が記述する 13 世紀後半になると、アイヌの祖先はサハリン島の南部に居住域をなすにいたっていたと考えられる。ちなみに、擦文文化は 12 世紀ないし 13 世紀には終末を迎えるので、さきにあげた『元史』の 1264 年、『経世大典』の 1273 年の時点での骨嵜（つまりアイヌ）の居住域を擦文文化の遺跡の分布から導き出すことは難しい。ただし大まかな推定は可能であり、考古学的な情報からも、骨嵜はサハリン島の南部に居住していたものと考えてよいであろう。

以上のような確認の上に、最初の『元史』と『経世大典』の記述の比較に戻ろう。図 2 に、『経世大典』の弩児哥（ヌルゲン／ヌルガン）の位置、および推定される罽因・吉烈迷・骨嵜の居住地と、『元史』から推定される吉里迷・骨嵜・亦里于の居住地を地図上に示した。『元史』の三つの集団は文字を斜体にして下線を引いてある。吉里迷の東に骨嵜と亦里于がいると記されているので、『経世大典』の吉烈迷と『元史』の吉里迷が同じ集団をさすのに間違いなければ、『元史』の骨嵜と亦里于の居住域はサハリン島の東のオホーツク海の海上に求められることになる。しかしこれまで検討してきたように、亦里于はともかく骨嵜はこの時代、吉里迷の南に住んでいたことは明白である。図 2 が示すように、実際には南なのに、『元史』には東と記されている。つまり『元史』の記載は、90 度ずれている。ただしそれは、反時計回りであるという点に注意しなければならない。

### 3. モンゴル帝国時代の史料に見える方位のずれの問題

モンゴル時代の史料に記された方位が、実際とは時計回りに 90 度ずれた記述があるのは、これまでも報告されている。それは主に天山ウイグル王国やカイドゥの乱などに関する記述についてであり、モンゴリアの西方に関連しての史料である [安部 1955 : 82, 297, 389]。この問題に関して、大葉昇一はひとつの解釈を示した [大葉 1997]。大葉によれば、モンゴル帝国時代にイル・ハン国で作成された「回回図子」という地図がある。これは『秘書監志』巻 4 にその名が記されており、秘書監ジャマール・アッディーン（扎馬刺丁）によって中国に将来された。大葉はこの「回回図子」が方位を間違えており、その地図をイル・ハン国のみならず元朝でも使用したため、方位に関して同じようなずれが生じてしまったと考

えた。「回回図子」の方位がずれていたというのは、清末の魏源が『永楽大典』から書き写して『海国図志』に収めた「元経世大典地理図」の方位がずれていることを根拠にしている。ただ「回回図子」は現存しないため、大葉の所説は可能性の提示に留まるといえる。

最近、村岡倫はこの問題に関してある見解を発表した [村岡 2020]。村岡によれば、現代モンゴル語の「南」を意味する語は *өвөр* (*öbür, ebür*), *өмнө* (*emün-e*), *урд* (*uridu, urida*)<sup>(3)</sup> であるが、これらの語は「前」という意味でもある。「北」を意味する *умар* (*umar-a*), *хойно* (*qoyin-a*), *ар* (*aru*) は「後ろ」という意味でも使われる。つぎにモンゴル語では、「右」と「西」は共に *баруун* (*baracun*) という。また、「左」と「東」は共に *зүүн* (*jegün*) という。

村岡は、漢語の文献に残された記載は、もともとはモンゴル語で話されていた情報だったのではないかと考えた。モンゴル語では方位を示すに際して、前後左右で表現するので、この言葉を漢人が漢語に翻訳する際に、前が南、後ろが北、右が西、左が東に置き換えられたのではないかとするのである。下の表1のように、東を前にした場合は、モンゴル語の前後左右は、それぞれ漢語の南北東西へと翻訳された。そしてこの漢語訳が文字として記録され、後に『元史』などの史書に収められた際に、東西南北がそのまま記載された結果、実際の方位とはずれた記載が史書に残されたというのである。表1は、村岡が天山ウイグル王国など西方の史料からまとめたものであるが [村岡 2020 : 9]、実際の方位と漢籍に記された方位を比較すると、時計回りに90度ずれていることが確認できる。

漢籍に記された方位	使われたモンゴル語の単語	実際の方位
南	前 (こちら側)	東
北	後ろ (向こう側)	西
東	〔前を見て〕左	北
西	〔前を見て〕右	南

表1 漢籍に記された方位と実際の方位

#### 4. サハリン島における方位のずれとその理由

さきにものべたように、『元史』には吉里迷の国の東に骨嵬と亦里于がいたと記

されているが、この方位は『経世大典』からの推定や考古学資料による確認をもとにした実際の位置と比較すると、反時計回りに90度ずれている。そのことを踏まえて、大葉・村岡両氏の所説からこの問題について検討を加えてみよう。

まず大葉が指摘するように、『元史』の方位の誤りが「回回図子」によるものだとすれば、「回回図子」を始めとするモンゴル帝国時代の地図には、サハリン島が描かれていなければならない。しかしさきにも述べたように、「回回図子」は現存しない。そこでモンゴル帝国時代のユーラシア地図の面影を残した地図として知られる、「混一疆理歴代国都之図」から探ってみよう。この地図は、朝鮮王朝（李朝）で作成されたもので、明の建文4年（1402）の年号を持つ。この地図の北東アジアの部分にはアムール河（黒龍江）とウスリー川かと思われる大河が描かれているが、サハリン島は見えない（図3）。また①から⑥までの文字は以下のとおりである〔中村2020〕。なお、「／」は改行をしめす。



図3 「混一疆理歴代国都之図」の北東アジア部分（龍谷大学大宮図書館蔵）

① 「水達々忽／賜？／設萬／下千戸口／壽」

意味不明である。書写の際に書き誤りが生じたのであろうか。「水達々」は②の

「水達々」のことである。また「萬／下千戸」の部分は、④の「萬戸下／千戸」と同じ表現で、「万戸のもとの下千戸」ということであろう。千戸には、上中下の差があった。なお別本である長崎県の本光寺図では、この部分は「水達々忽昌改萬戸下千戸福水達々」となっている。本光寺図の「忽昌改」は「忽里改」の誤りで、五軍民万戸府のひとつである<sup>フ</sup>胡<sup>リ</sup>改<sup>カ</sup>軍民万戸府のことであろう。本光寺図の最後の「水達々」は、龍谷大学図では少し離れたところに書かれている②の「水達々」が一緒にされてしまったものであろう。

## ② 「水達々」

『元史』巻 59、地理志 2、に「合蘭府水達達路」という官署の名が見える。「水達達」とはアムール河流域に住むツングース系の集団を意味する語で、この表現は元代にしか見られない。なお水達達については、本稿の注 1 でも言及している。

## ③ 「合蘭府」

上に記したように、『元史』には「合蘭府水達達路」という官署の名が見える。

## ④ 「水達々列速萬戸下／千戸青狗魁孫賽」

「列速」は書き誤りであり、正しくは「<sup>ギ</sup>列<sup>レ</sup>迷<sup>ミ</sup>」である。『元史』の吉里迷、『国朝文類』の吉烈迷である。したがってこの部分は、「水達達・吉列迷万戸のもとの下千戸の…」と読むべきではないか。これに続く「青狗魁孫賽」のうち、青狗は『元史』巻 149、耶律留哥伝にその名が見える金朝の將軍の名であるが、ほかの意味は不明である。なお『元史』その他の史料には、「水達達・吉列迷万戸府」という官署は見あたらない。『元史』巻 24、仁宗本紀 1、皇慶元年 3 月戊戌に「女直・水達達万戸府の冗員を省く」とあり、また『元史』巻 44、順帝本紀 7、至正 15 年 8 月戊寅には「<sup>ウ</sup>者<sup>ジ</sup>野人・<sup>ギ</sup>列<sup>レ</sup>迷<sup>ミ</sup> 等处諸軍万戸府を<sup>ハ</sup>兒<sup>ル</sup>分<sup>フ</sup>の地に立てる」とある。吾者とは『金史』には「<sup>ウ</sup>兀<sup>デ</sup>改<sup>カ</sup>」と見え、さきの『経世大典』の「兀的哥」と同じく、ツングース系のウデへ民族の名称につながることから、ツングース系の集団と思われる。

## ⑤ 「採珠」

『元史』巻 94、食貨志 2、歳課に「珠を産するの所は、曰く大都、曰く南京、曰く<sup>ラ</sup>羅<sup>ラ</sup>、曰く水達達、曰く広州」とある。水達達の地で産する珠とは、淡水真珠のことであろう。また、『遼東志』巻 9、外志、乞列迷、には「男は耳に珠を垂らす」とある。これも淡水真珠のことを示しているのかもしれない。

## ⑥ 「五国城」

形のゆがんだ円のなかに五国城と記されている。これは五国部ともいう。『遼史』卷 33、營衛志下、部族下、に「五国部。剖阿里国・盆奴里国・奥里米国・越里篤国・越里吉国である。聖宗の時に来附ったが、本の土に居し、以て東北の境を鎮めよと命じられた。黄龍府の都部の署司に属している」とある。

以上のように、アムール河下流域のモンゴル帝国／元朝期およびそれ以前の官署や、水達達、吉列迷などの諸集団の名が見えるが、骨嵬は出てこない。それはサハリン島の存在が明確には知られていないことと、元朝の支配が骨嵬には及ばなかったことによるものと思われる [中村 2021a]。

以上のことから、「回回図子」を始めとするモンゴル時代の地図には、サハリン島は描かれていなかったのではないかと推定される。ちなみに、中国の歴代王朝の地図に、サハリン島が描かれるようになったのは、清代の康熙帝の時に、レジスらの宣教師に命じて作成させた「皇輿全覽図」(1717 年) が初めてであり、それもサハリン島の北部を含むのみであった [中村 2021a]。このことから考えても、モンゴル帝国時代の「回回図子」には、サハリン島は描かれていなかったと思われる。このことは、方位のずれが生じた原因が、「回回図子」によるものではないことを強く示唆する。また、サハリン島の方位のずれが反時計回りであることは、大葉の説では説明がつかないことも指摘しておかなければならない。

つぎに村岡の見解に従って、前後左右の見方で考えてみよう。図 2 に示したようにサハリン島における元軍の勢力圏は、支配下にあった吉列迷の居住範囲であり、サハリン島の北部である。ここから見れば、東征元帥府が置かれているヌルゲン／ヌルガンの方向、つまり西が前だったと考えるべきではないか。もしこの前提が正しいとすれば、東が後ろということになる。同様に右は北、左は南を指すことになる。村岡の見解に従えば、この場合の左は実際には南なのであるが、漢語では東と表現される。このような経緯で、実際には吉里迷(吉烈迷)の南方に居る骨嵬・亦里于が、漢語史料では東と表記されることになったのであり、『元史』の反時計回りの方位のずれについての説明がつくことになる。

## 5. おわりに

これまで、元代の史料に見える方位のずれの問題についての検討は、主に西方に関する史料を対象に議論が進められてきた。筆者は、北東アジアの史料からこの問題を考察したわけだが、結論としては村岡の見解を支持することとなった。

ただ今回は、サハリン島の北部からアムール河下流域のヌルゲン／ヌルガンの方向を前と見て考えを進めたが、もっと大まかに大陸側を前と見なしても同じ結論になる。筆者は、確実に前と見なしうると判断したヌルゲン／ヌルガンを論拠として考察したが、このような狭い範囲で前を設定することが適切であるのか。今後の課題とするとともに、類例の検証を続けていかなければならないと考える。

### 【未注】

- (1) 亦里干については、「干」を「干」の間違いとして、亦里干の誤りである可能性を指摘できる。モンゴル語で「たみ」を意味する иргэн (irgen) [小沢 1983 : 208] を漢字の音で宛てたものとするのである。同じような間違いは、アムール河流域に住む水達達という集団についての記述に見つけることができる。『元史』には「女直・水達達」などと、女直（女真）と並列で史料に登場することが多く、ツングース系の集団であろうと思われる。この水達達の史料上の初出とされているのが、<sup>ほうたいが</sup>彭大雅『黒韃事略』の記述である。同書は、1233年に著者が南宋からモンゴル帝国の宮廷に派遣された時の記録で、<sup>じよてい</sup>徐霆が1237年に編纂した書である。ここに「斛速益律干」という語が見え、これに「<sup>すいだつたん</sup>水韃韃」の注記がある。「斛速益律干」は「斛速益律干」の誤りで、モンゴル語の ус иргэн (usu irgen) [小沢 1983 : 208, 417]、つまり「水の民」という意味になる。これが『元史』の水達達のことと考えられる。このような例を考えあわせると、亦里干が亦里干の誤りであった可能性はある。そうすると、ここは「骨嵬の亦里干 (irgen: たみ)」と読むことになる。しかし『元史』には「其の<sup>こくに</sup>国の東に骨嵬と亦里干という<sup>ふたつ</sup>両つの部が有って」とあるように、骨嵬のほかにもうひとつの集団があったことは間違いないので、「骨嵬の亦里干」と読むことは難しい。骨嵬と並列されている集団は「亦里干」という名前だったかもしれないし、あるいは「○○の亦里干」というように、その名が正確に記録されなかったのかもしれない。ただ骨嵬のほかにも

うひとつの集団の存在が元朝側から把握されていたことは間違いない。なお『元史』や『経世大典』に「骨嵬亦里干」という用例がほかに見あたらないため、この問題についてはこれ以上の考察は難しい。

- (2) 『経世大典』は元代の制度や法律などをまとめた政書である。趙世延や虞集などの撰で、1331年に成立した。『経世大典』は明代の中期には散逸してしまい、現在には伝わらない。『元史』の志の部分は『経世大典』をもとに書かれたとされている。『経世大典』は『永楽大典』や『国朝文類』などに引用されて残っている。本稿の引用部分は、『国朝文類』に残されたものである。近年、『経世大典輯稿』が刊行された[趙・虞 2020]。なお本稿の引用部分で「骨嵬」とあるところは、[趙・虞 2020:366~367]では「嵬骨」と記されている。これは『国朝文類』の諸版本に共通する誤りであり、『元史』に従って改めた。
- (3) 以下本稿では、村岡があげているモンゴル国で使われているキリル文字による表記に続いて、[小沢 1983]により、モンゴル文語のアルファベット表記をかっこ内に併記する。

#### 【参考文献】

- 安部健夫（1955）『西ウィグル國史の研究』彙文堂書店。
- 大葉昇一（1997）「元朝、イル・ハン国の文献にみる時計回り方位九〇度のずれについて」『史観』第137冊、19~34頁。
- 小沢重男（1983）『現代モンゴル語辞典』大学書林。
- 瀬川拓郎（2008）「サハリン=アイヌの成立」菊池俊彦・中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ—奴児干永寧寺碑文とアイヌの北方世界—』高志書院、225~252頁。
- 宋 濂（1976）『元史』中華書局。
- 趙世延・虞集（2020）（周少川・魏訓田・謝輝輯校）『経世大典輯稿』中華書局。
- 中村和之（2006）「金・元・明朝の北東アジア政策と日本列島」天野哲也・臼杵勲・菊池俊彦編『北方世界の交流と変容—中世の北東アジアと日本列島』山川出版社、100~121頁。
- 中村和之（2008）「モンゴル時代の東征元帥府と明代の奴児干都司」菊池俊彦・中村和之編『中世の北東アジアとアイヌ—奴児干永寧寺碑文とアイヌの北方世界

一』高志書院、43～64 頁。

中村和之 (2020) 「『混一図』に描かれた北東アジア」村岡倫編『最古の世界地図を読むー『混一疆理歴代国都之図』から見る陸と海』(龍谷大学アジア仏教文化研究叢書 16) 法藏館、81～102 頁。

中村和之 (2021a) 「モンゴル帝国と北の海の世界」櫻井智美・飯山知保・森田憲司・渡辺健哉編『元朝の歴史ーモンゴル帝国期の東部ユーラシア』(アジア遊学 256 号)、239～250 頁。

中村和之 (2021b) 「13、14 世紀のアムール河下流域の寒冷化についての事例提供」『函館大学論究』第 53 輯第 1 号、59～69 頁。

<https://doi.org/10.18896/00000365> (2022 年 9 月 30 日参照)

M. M. プロコーフィエフ、V. A. デリューギン、S. V. ゴルブノーフ〔中川昌久訳〕(2012) 『サハリンと千島の擦文文化の土器ーサハリンと千島へのアイヌ民族の進出』函館工業高等専門学校。

村岡 倫 (2020) 「モンゴル帝国時代の史料に見える方位の問題ー時計回り 90 度のずれが生じる要因ー」『13、14 世紀東アジア史料通信』第 25 号、2～14 頁。

<https://irdb.nii.ac.jp/01140/0004675805> (2022 年 9 月 30 日参照)

### 【謝辞】

本稿の執筆に際して、龍谷大学の村岡倫教授には、龍谷大学大宮図書館蔵の「混一疆理歴代国都之図」の閲覧について便宜を計らっていただきました。心から感謝申しあげます。また本研究は、JSPS 科研費 20H01306 および 20H01323 の助成を受けたものです。

## Abstract

In Chinese and Persian texts of the Mongolian Empire and Yuan Dynasty, there are examples of descriptions of Central Asia that show a 90-degree clockwise shift in the azimuthal sense. The reasons for this have remained unclear, but a new interpretation of this query has been recently presented. The contents of the report are as follows.

Initially, the Mongolian language expressed direction as four quarters (front, back, right, left). When the direction words were translated into Chinese, they became cardinal directions (south, north, west, east). The translation was later included in the official Chinese historical works, like the "Yuan Shi" (History of the Yuan Dynasty), without any corrections. As a result, some of the descriptions in the history books are out of alignment with the actual direction.

The author noticed a description among Chinese historical documents referring to the battle between the Yuan Dynasty and Ainu on Sakhalin Island recorded the direction as "east," but the actual direction was "south." The location from the text shows a 90-degrees counterclockwise from the actual site. The reason may be explained as follows: they set "west," the direction from Sakhalin Island to the headquarters of the Yuan Dynasty at the lower Amur basin, as "front." In this case, the southern part of Sakhalin Island, the Ainu settlement area, is described as left in Mongolian. The Mongolian left was rendered east when translated into Chinese, resulting in an error with the actual direction. Thus, the Mongolian concept of direction was not based on cardinal direction (east, west, north, and south) but on four quarters (front, back, left, and right), as confirmed by historical documents related to Northeast Asia.

Keywords: Sakhalin Island, Mongol Empire, Yuan Dynasty, orientation, Ainu